

台湾総統選で頼清徳氏勝利

台湾有事（日本有事）の脅威は続く

台湾総統選挙は与党民進党の主席で、副総統の頼清徳氏が国民党など他の2候補を破り、2期8年にわたって中国と対峙して来た蔡英文総統の後継者に決まりました。「台湾統一」に向け、軍事的・経済的威圧を含む露骨な選挙介入で親中政権を作ろうとした習近平の当面の戦術は失敗したことになります。

頼氏「台湾は既に主権独立国家」

総統選を制した頼氏は選挙戦中の今月9日の記者会見で、世界の28カ国128社のメディアを前に「平和の追求は侵略者の善意には頼れない」と訴えました。「主権なき平和は香港と同じ偽りの平和だ」などとも述べました。

対して親中派の野党は国民党の馬英九前総統がドイツメディアの取材に、兩岸問題（統一問題）では「習主席を信用すべき」と述べるなど、終盤になって本性を現わしていました。

しかし、立法委員（定数113）選挙は与党が過半数を確保できず、政権の不安定化が心配されます。習近平は元々、武力統一を放棄しないことを公言しており、大統領選での米国内の混乱などに乗り、これまでの

「威嚇」

を越え、軍事行動に出る可能性も指摘されています。なお、頼氏はこのところ「台湾独立」という表現を封印しています。しかし、1年前の民進党主席就任時に「台湾はすでに主権独立国家だ。改めて台湾独立を宣言をす



る必要はない」と述べており、中国に譲歩したわけではないことを強調しています。

露骨な工作に失敗した習近平

今回の総統選では、中国による異常なまでの選挙介入がありました。頼氏自身も「中国は毎回、台湾の選挙に介入してきたが、今回は最も深刻だ」と述べています。

その最たるものが、「台商」と呼ばれる中国在住の台湾ビジネスマンの帰省です。台湾には在外投票制度が無く、国民党支持者が多い台商が団体に航空券を手配して期日前に投票。前回の10万人を大幅に上回る国民党支持者が帰省して投票したとみられます。

中国はこのほか、与党の強い地域に限定して中国が農産物の禁輸をしたり、親中派のネットメディアの記者に世論調査をねっ造させ「野党有利」の二セ情報を拡散したケースもありました。公選の自治会長である「里長」の1000人（全土で7000人）が選挙戦前に大陸に招待されて接待を受けたことも明らかになっています。（了）

日本会議、田久保会長がご逝去



の息吹』（令和6年1月号）で、憲法改正についての国会の現状を憂い、「維新（明治維新）に相当する歴史的な改憲事業に保守の腰が引けている。何と悲憤慷慨されたいま

外交評論家で日本会議会長の田久保忠衛（たぐぼ・ただえ）氏が9日、肺炎のため東京・三鷹市の杏林大学附属病院で逝去されました。90歳でした。通夜は15日、告別式は16日に東京・品川区の桐ヶ谷斎場で行われます。

また、岸田内閣に対し、「憲法を改正して未曽有の危機に対応するつもりだがどうか」と信を国民に問うてはどうか」と迫り、「政権の延命という小さな問題ではなく、戦後の日本が自らを取り戻す歴史的な転機にするのだ」と奮起を促しておられます。

通夜告別式

「日本の息吹」
令和6年1月号の遺稿



田久保氏は時事通信社でワシントン支局長、外信部長などを歴任し、昭和59年に杏林大教授に就任。平成27年からは日本会議の第4代会長を務められ、憲法改正や皇位の男系継承維持など重要な課題についての国民運動の先頭に立って来られました。

田久保氏は遺稿となった日本会議機関誌『日本